

『往生拾因』の引用經論疏について

— 第一因廣大善根章を中心に —

明 山 安 雄

法然淨土教成立以前における日本淨土教を代表するものは、叡山系に源信（九四二～一〇一七）の「往生要集」（九八五成立）を中心としたものと、南都三論系に、永觀（一〇三三～一一二二）の「往生拾因」（一一〇〇～一一〇三成立）、珍海（一〇九二～一一五二）の「決定往生集」（一一三九成立）とが注目される。これらの三著述は、ともに廣義の「彌陀念佛論」を展開しているが、それぞれ獨自の思想形態を具備していることは云うまでもない。しかし、これらの思想は、やがて法然淨土教成立えの思想的媒介、背景となつたものであるといひ得よう。これを論證するものとして、近時、先學各位によつて、源信、永觀、珍海教學と法然教學との關連において有益な成果を續々と發表せられて、法然上人以前の淨土教思想に關する體系的解明がなされつゝある現況である。

かような成果を導き出されて來つた過程には、各々の著述に著された教學形成の背景としての思想的根據（思想構成材としての經論疏）が如何ようであつたかを總合的に把握されていないむきもあらうかと

『往生拾因』の引用經論疏について

考えられる。かゝる意味において、具體的に「往生要集」「往生拾因」「決定往生集」の三者を、比較検討作業をなすことによつて、各々の關連性を追求していくことも意義あることと考え、こゝに「往生拾因」を中心として「往生要集」「決定往生集」の比較研究の基礎作業として、先ず、永觀の「往生拾因」の思想的根據としての引用經論疏を抽出した資料の一部分をなすものが本稿である。さて「往生拾因」は、念佛の一行を開いて十種の往生因に分ち、即ち

- 一 「廣大善根故」
- 二 「衆罪消滅故」
- 三 「宿緣深厚故」
- 四 「光明攝取故」
- 五 「聖衆護持故」
- 六 「極樂化主故」
- 七 「三業相應故」
- 八 「三昧發得故」
- 九 「法身同體故」
- 十 「隨順本願故」

とし、

「一心稱念阿彌陀佛一〇〇〇〇故必得往生」を力説している。かような十種の往生因構成の思想的論證（教證）をする經論疏として、「無量壽經」「觀無量壽經」「阿彌陀經」「稱讚淨土經」をはじめとする淨

土教經典、曇鸞「往生論註」道綽「安樂集」善導「觀經疏」「往生禮讚偈」「觀念法門」懷感「釋淨土群疑論」窺基「西方要決」迦才「淨土論」嘉祥「觀經疏」等の諸論疏を中心に、また各種の經論疏、なかでも三論、眞言密教關係のものをもつてみづからの教説の裏付に努めている。この教説、就中教義的實踐的根據を道綽「安樂集」懷感「釋淨土群疑論」とに見出しているのであるが、「往生拾因」の口稱念佛の實踐的効果の證據、根據そのものについて内容的に深くほり下げて行く程、善導教學の思想的影響が著しく見出されて來ることに注目せねばならない。又、「往生拾因」は、特に源信の「往生要集」からの、（源信を媒介として經論疏を引用？）引用事例が多いことに注目すべきである。

さて、「往生拾因」の思想的論據とする經論疏の引用形式としては概ね次のように分類がでしよう。

- (一) 明確に出典經論疏名を擧げている場合（この場合、具名、又は略名をも含む）
 - (1) (一)のような形式をとらずに、ただ「經云」あるいは「論云」「疏云」とのみ前置している場合
 - (2) 何等の指示なく經論疏の特定個所原文を抽出している場合
 - (3) (一)(二)の形式において取捨省略がなく忠實に原文そのまゝを引用されている場合と、原文の取意あるいは略抄の形式をとっている場合等である。

了意「往生拾因直談」十卷（佛大圖書館藏、西谷寺文庫一八二）
 貞準「往生拾因新鈔」三卷（佛大圖書館藏、極樂寺文庫三二八）
 亡名「首書往生拾因」四卷（佛大圖書館藏、極樂寺文庫三二四）
 等の先學の註釋書、註記を手がかりに引用諸經論疏及一部脚註の性格をもつものをも含めて抽出したものであるが、抽出方法論（取捨、不適當、不充分）又、脚註等を意のつくすまゝに出來なかつたし、又資料提供に終つた點をおことわりしておきたい。

以上

尙、本稿に抽出した引用經論疏の作業を進めるに當り、了慧「往生拾因私記」三卷（淨全十五—三九五a—四四六a）

「往生拾因」

念佛宗 永觀集

『第一一心稱念阿彌陀佛。廣大善根故必得往生。阿彌陀經云。不可少善根。得生彼國。若有善男子善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。乃至七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛與諸聖衆。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生。已上』^①

①「阿彌陀經云」 鳩摩羅什譯「佛說阿彌陀經」(正藏十二・三四七b)

a、源信「往生要集」卷下、大文第八・念佛證據に出づ(正藏八四・七七b)

b、珍海「決定往生集」第五修因決定者の三明「往生正業」に有り(正藏八四・一一〇c)

『問。設使一心專念佛名。未爲大善。那得往生。答。稱讚淨土經云。得聞如是無量壽佛無量無邊不可思議功德名號等已上』^②

②稱讚淨土經云、玄奘譯「稱讚淨土佛攝受經」(正藏十二・三五〇a)

『西方決云。諸佛願行成此果名。但能念號具包衆德。故成大善。不廢往生。已上』^③

③「西方要決云」窺基撰「西方要決釋疑通規」(正藏四七・一〇七b・c)

a、源信「往生要集」卷下、大文第十問答料簡者、第五明臨終念相に出ず(正藏八四・八四b)

『往生拾因』の引用經論疏について

a 珍海「決定往生集」第五修因決定者、第五別明「稱名利益」者に有り(正藏八四・一一二a)

『故知。彌陀名號之中。即彼如來從初發心。乃至佛果。所有一切萬德。皆悉具足。無有缺減。非唯彌陀一佛功德。亦攝十方諸佛功德。以一切如來不離阿字故。因以此念佛者。諸佛所護念。今此佛號文字。雖少。具足衆德。如如意珠形體。雖少。雨無量財。何況四十二字功德。圓融無礙。一字各攝諸字功德。阿彌陀名如是。無量不可思議功德合成。一稱三南。無阿彌陀佛。即成廣大無盡善根。如彼丸香。僅燒二分。衆香芬馥。亦如大網。少牽一目。諸目振動。』^④

④菩薩の階位(大乘)——菩薩が初に菩提心を發してから、修行の功德を積み、佛果に至るまでの階位で、竺佛念譯「菩薩瓔珞本業經」二卷(正藏二四・一〇一a—一〇二a)に詳説する。

⑤一切萬行萬德——彌陀名號の功德、深勝性を強調する思想的背景として(注、源信教學との關係において)

a 源信「往生要集」卷中、大文第五助念方法者の第三對治懈怠者の二に

「二、名號功德。如維摩經。諸佛色身。威相種性。戒定智慧。解脫知

見。力無所畏。不共之法。大慈大悲。威儀所行。及其壽命。說法教化。成就衆生。淨佛國土。具諸佛法。悉皆同等。是故名爲三藐三佛陀。名爲多阿伽度。名爲佛陀。阿難。若我廣說。此三句義。汝以劫壽不能盡段。正使三千大千世界滿中衆生。皆如阿難。多聞第一得念總持。此諸人等以劫之壽亦不能受」

(正藏八四一五八c、五九a)

b、源信「往生要集」卷中大文第六別時念佛者の第二臨終行儀に

「既知佛子木來具往生業。今須專念彌陀如來令業增盛。然彼佛功德無量無邊不可具說。今現在十方各恒河沙等諸佛。恒常稱讚彼佛功德。如是稱讚設經恒沙劫。終不可窮盡。佛子總應一心歸命彼佛功德。應念我今一念中盡以歸命彌陀如來一切萬德云々」(正藏八四一七〇b)

c、源信「觀心略要集」

「於阿彌陀三字。可觀空假中三諦。彼阿者即空。彌者即假。陀者即中也。」(惠心僧都全集二ノ一五七a)

d、源信「正修觀記」卷中

「觀彌陀名字體用。阿字無。故諸法空寂。彌字量。故萬像森然。

陀字壽。故中道實相。此三諦中攝一切法。是故佛音。以三諦攝一切法。不出三諦。」(惠心僧都全集二ノ二六二b)

e、源信「觀心略要集」

「問。不修理觀。只稱一佛名號一人。得往生不如何。答。亦可得往生也。彼繫念定生之願未云修理觀。聖衆來迎願。未云修理觀。聖衆來迎之誓。只是至心稱名。夫名號功德以莫大故。所以

空假中三諦。法報應三身。佛法僧三寶。三德。三般若。如此等一切法門。悉攝阿彌陀三字。故唱其名號。即詔八萬法藏。持三世佛身也。纔稱念阿彌陀佛。冥備此諸功德。猶如燒一丸香一分衆香悉熏。浴大海一滴用衆河水耳。故慈恩云。諸佛願行成此果名。但能念號具包衆德。故成大善不廢往生云々」

(惠心僧都全集二ノ一八〇a)

f、源信「正修觀記」卷中

「阿彌陀云。執持名號。爲大乘善根。其意在斯。長舌證誠。誰不生津」(惠心僧都全集二ノ二六三a)

g、舜昌

「述懷鈔」に源信の「念佛略記」を引いて

「因行果德自利利他 內證外用依報正報

恒沙塵數無邊法門 十方三世諸佛功德

皆悉攝在六字之中 是故稱名功德無盡

最後臨終一心念佛 生死之罪速疾消滅

決定往生極樂世界 上求下化大願圓滿」

(續淨四一〇六b)

○ 永觀以後について

a、珍海「菩提心集」卷上

「阿彌陀佛の名を念すべし。此名に無量無邊の功德を攝めたり。これをいへば、すなはち無量の功德よばれてわが身に來り集る。その時無始よりこのかたの煩惱惡業逃去りぬ。たとへば善き藥ある處には惡鬼のにげさるがごとし。又彼佛よばれてわが前に來りたまふと觀

ずべし。又かの佛の光明無量壽命無量にましますことを聲につけて
觀ぜよ」(淨全十五—五〇七b)

b、忍空(天台)「勸心往生論」

「阿者無義是卽空般若德權智實智三觀四惠四智十智十八空智五百總
持八萬四千牟尼法蘊十方諸佛無量妙智皆在阿字」彌者義是卽假解
脫德大悲三脫四弘六度十力十八不共三十七品三十二相八十隨好
百八三昧八萬四千諸對治門十方諸佛無邊德海含藏彌字」陀者壽義
是常住法身德第一義諦二諦三諦四諦八諦凝然萬德八萬四千諸波羅蜜
十方無限妙理具包陀字。故稱一字卽備萬德。若稱彌陀與諸
佛二等復次空卽假中故有三般若——中略——阿字中卽具三德——
中略——彌字中亦具三德——中略——陀字中亦具三德——中
略——故知萬法卽是彌陀也」(淨全十五—五三七a・b)
法然上人a「選擇本願念佛集」

第三 念佛往生本願篇 私釋段

「初勝劣者念佛是勝餘行是劣。所以者何。名號是萬德之所歸也。然
則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等一切內證功德。相好光明說法
利生等一切外用功德皆悉攝在阿彌陀佛名號之中。故名號功德最爲勝
也。餘行不然。各守一隅。是以爲劣也。——中略——次難易義者念
佛易修。諸行難修——中略——故知念佛易故通於一切諸行難故不通
諸機。然則爲令一切衆生平等往生捨難取易以爲本願歟」(淨全七—
一九—二〇)

b、「逆修說法」 三七日

「殊勝功德故者。彼佛因果惣別一切萬德 皆悉名號顯故、一度唱

【往生拾因】の引用經論疏にこころ

南無阿彌陀佛得大善根」(昭和新修
法然上人全集二五三)

c、「和語燈錄」卷一所收の「三部經釋」に出ず(淨全九—四七五正)

⑥「阿字」

a、善無畏譯

「佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界祕密三身佛果三種悉地眞言儀軌」
「五智如來者出生阿字中。化無量身 昔聞阿字一文者。今毘盧遮那
如來是也」(正藏十八—九一四b)

b、一行記「大毘盧遮那成佛經疏」卷第七

「經曰。謂阿字一門一切諸法本不生故者。阿字是一切法教之本。凡
最初開口之音皆有阿聲。若離阿聲則無一切言說。故爲衆聲之母。凡
三界語言皆依於名。而名依於字。故悉曇阿字。亦爲衆字之母。」
(正藏三九—六五一c)

羅什譯「摩訶般若波羅蜜經」卷第五、廣乘品第十九「阿字門。一切
法初不生故」(正藏八一—二五六a)

c、羅什譯「大智度論」卷第四十八

「復次諸陀羅尼法。皆從分別字語一生。四十二字是一切字根本。
因字有語因語有名因名有義。菩薩若聞字因字。乃至能了
其義」(正藏二五—四〇八b)

d、空海撰「大日經開題」

「題如是諸字門皆以初阿字爲本體」。所謂阿字則大日之種子眞

言。此經以「此一字」爲體。此經始終唯說「此字義」。此字具「無量無邊義」具說「小分」經云」（正藏五八一—二c）

『故雙觀經云。其有得聞彼佛名號。歡喜踊躍乃至一念。當知此人爲得大利。即是具足無上功德』^⑦。已上凡夫行者煩惱胎中一稱「南無阿彌陀佛」。此一音聲勝餘音聲。如「頻伽耶聲勝衆鳥」。

⑦「雙觀經云」康僧鎧譯「佛說無量壽經」卷下（正藏十二—二七九a）

『問。善惡諸業熏習所成。設雖衆德具足名號。一念何得無上功德。答。未必不可。於彼八十萬億那由他劫。爲阿耨菩提。行前五波羅蜜。功德。比下聞壽量。一念功德。千萬億分不及其一。』故彼偈說。又於無數劫。住於空閑處。若坐若經行。除睡常攝心。以是因緣。故能生諸禪定。八十億萬劫安住心不亂。舉一有善男女等。聞我說壽命。乃至一念信其福過於彼。已上。一指剪時五體不安。一念信發萬善自動。是以功德勝劣不由時劫長短。釋尊壽命功德如是。無量壽佛功德何別。』

⑧「於彼八十萬億那由他劫……不及其二」

a、羅什譯「妙法蓮華經」卷五 分別功德品第十七

「爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。其有衆生聞佛壽命長遠如是。乃至能生一念信解。所得功德無有限量。若有善男子善女人。爲阿耨多羅三菩提故於八十萬億那由他劫。行五波羅蜜。檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。除般若波羅蜜。以是功德。此百分千分百千萬億分不及其二。乃至算數譬喻所不能知」（正藏九—四四c）

b、源信「往生要集」卷下 大文第十問答料簡 第七諸行勝劣

「汎爾禪定尙既如是。況念佛三昧耶。問。若禪定業勝。讀誦解義等。云何法華經分別功德品。以八十萬億那由他劫所修前五波羅蜜功德。校下量聞法華經。一念修解功德。百千萬億分之一分。何況廣爲他說耶。答。此等諸行各有淺深。謂偏圓教有差別。故。若當教論勝劣如前。若諸教相對。偏教禪定不及圓教讀誦事業」（正藏八四—八六c）

⑨「彼偈說……乃至一念信其論過於彼」

羅什譯「妙法蓮華經」卷五 分別功德品第十七

「又於無數劫。住於空閑處。若坐若經行。除睡常攝心。以是因緣。故能生諸禪定。八十億萬劫安住心不亂。持此一心福。願求無上道。我得一切智。盡諸禪定。是人於百千萬億劫數中行此諸功德。如上之所說。有善男女等。聞我說壽命。乃至一念信。其福過於彼」（正藏九—四四a）

『故阿彌陀思惟經云。若轉輪王千萬歲中滿四天下。一七寶布。施十方諸佛。不如下。苾芻尼優婆塞優婆夷。彈指頃坐禪以平等心。憐愍一切衆生。念阿彌陀佛功德。已上』

生念阿彌陀佛功德已上』

⑩「阿彌陀思惟經」云

a、阿地瞿多譯「陀羅尼集經」第二、阿彌陀佛大思惟經說序分第一「若轉輪王十萬歲中。滿四天下七寶。布施十方諸佛。不如苾芻苾尼優婆塞優婆夷等。一彈指頂坐禪。以平等心憐愍一切衆生。念阿彌陀佛功德」（正藏十八・八〇〇b）

b、源信「往生要集」卷下、大文第七明念佛利益の第五念彌陀一別益に出ず（正藏八四・七三c）

『故經說』下輩云。乃至一念念於彼佛。以至誠心願生其國。此人臨終夢見彼佛亦得往生已上是故彌陀一念功德深廣無際。如來廣說不能窮盡。不爾何因速得往生。一念尙爾。況十念乎。況復一日七日念乎。何況一生不退念乎。』

⑪「故經說」下輩……………亦得往生」

康僧鎧譯「佛說無量壽經」卷下（正藏十二・二七二c）

『彼千手觀音說圓滿陀羅尼。先勸念本師彌陀。普賢大士現行禪師道場。同教念阿彌陀佛。實知。彌陀名號殆過大陀羅尼之德。又勝法華三昧之行。故但稱佛名直至道場。況往生淨土豈有留難。我等有何宿善幸今值此佛號。無上功德不求自得。淨土之業便以爲足。當知人中芬陀利華。依之十方恒沙諸佛出廣長舌各垂勸進。是表實語。可取仰信。』

⑫「彼千手觀音……………先勸念本師彌陀」

伽梵達摩譯「千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經」

『往生拾因』の引用經論疏222頁

「乃爲一切諸衆生故。說此廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼、——中略——發是願已。至心稱念我之名字。亦應專念我本師阿彌陀如來。然後卽當誦此陀羅尼神呪。一宿誦滿五遍。除滅身中百千萬億劫生死重罪——中略——誦持大悲章句者。臨命終時十方諸佛、皆來授手欲生何等佛土。隨願皆得往生」（正藏二十一・〇六b・c・一〇七a）

⑬「普賢大士……………教念阿彌陀佛」

「往生西方淨土瑞應傳」大行禪師第十五

「大行禪師齊州人也。入太山草衣木食。求法華三昧。感普賢菩薩現身。教師念阿彌陀佛。經三七日夜將平時。忽見瑠璃地。心眼洞明十方佛。後疾右疾右脇而終。葬後棺槨異香數日不敬。儀貌如生都不異也」（正藏五一・一〇五c）

⑭「又勝法華三昧之行」

飛錫撰「念佛三昧寶王論」

「一行既爾。萬行皆然。法華三昧者。卽念佛三昧也。是以如來名此勝定。爲三昧寶王爲光明藏」（正藏四七・一四四b）

⑮「俱稱佛名直至道場」毘耶舍譯「佛說觀無量壽經」

「若念佛者、當知。此人是人分陀利華。觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友。當坐道場、生諸佛家」（淨全一ノ五一）

⑯「芬陀利華」

a、吉藏造「法華遊意」

「舊云。外國稱分陀利此翻爲蓮花。今謂分陀利未必翻爲蓮花、涅槃經云。人中蓮花人中分陀利花既其兩出似爲異。今謂蓮花爲通。分陀利爲別。所以然智者——中略——分陀利者謂白蓮華、謂法顯傳及天竺諸傳皆云。分陀利者白蓮華也。」

(正藏三四—六四二c)

b、康僧鎋譯「佛說觀無量壽經」

「若念佛者。當知人即是人中分陀利花。」(正藏十二—三四六b)

c、善導「觀經疏散善義」卷第四

「云分陀利者名三人中好華亦名希有華亦名三人中上上華亦名人中妙好華此華相傳名蔡華是」(淨金二—七二)

①7 a、「十方恒沙諸佛」羅什譯「佛說阿彌陀經」

「如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經」(正藏十二—三四七b)

b、玄奘譯「稱讚淨土佛攝受經」

「示現廣長舌相。遍覆三千大千世界。周匝圍繞。說誠諦言。」

(正藏十二—三五〇a)

①8 「彼驚峯妙法多寶一佛證明。」又王城金典四方四佛俱說。凡厥處處集會

道場不如今說舌相證誠之盛矣。設雖彼伏怨世界疑惑者。豈不信受

哉。是故雙林決斷之筵、於淨土一門更無疑決一矣。①9

①9 「彼驚峯妙法多寶一佛證明。」

羅什譯「妙法蓮華經」卷第四見寶塔品第十一

「爾時佛前有七寶塔高五百由旬。縱廣二百五十由旬。從地踊出住在空中。——中略——爾時寶塔中出大音聲歎言。善哉善哉、釋迦牟尼世尊。能以平等大慧教菩薩法佛所護念妙法華經爲大衆說。如是如是。釋迦牟尼世尊。如所說者皆是真實。爾時四衆見大寶塔住在室中。又聞塔中所出音聲。皆得法喜怪未曾有從座而起恭敬合掌劫住一面」(正藏九—三二b·c)

①9 「王城金典四方四佛說」

a、曇無讖譯「金光明經」壽量品第二

「是妙座上各有諸佛所受用華衆寶合成。於蓮華上有四如來東方名阿閼南方名寶相西方名無量壽北方名微妙聲是四如來自然而坐師子座上。放大光明照王舍城及此三千大千世界乃至十方恒河沙等諸佛世界」(正藏十六—三三六a)

b、義淨譯「金光明最勝王經」

「頌曰

金光明妙法 最勝諸經王

甚深難得聞 諸佛之境界

我當下爲大衆宣說如是經

并四方四佛 威神共加護

東方阿閼尊 南方寶相佛

西方無量壽 北方天鼓音

我復演「妙法」(正藏十六・四〇四a)

②0 「彼伏怨世界疑惑者」

達磨笈多譯 「大方等大集經菩薩念佛三昧分」卷第三

「阿難。我又復念於此世界。以天眼觀見彼北方過三萬佛刹有一世界、其號伏怨。彼世界中有一衆生。於諸法中多起疑網」

(正藏十三・八四一b)

②1 「雙林決斷……無疑決」窺基撰 「西方要決釋疑通規」

「不了之教。涅槃之會釋通。淨土一門。雙林更無疑決十方諸佛。舒舌印成據斯上義。故非方便也」(正藏四七一・〇九a)

『如「大論」云。婆羅門城王作「制限法。若有下與佛食。聽佛語者輸五百金錢。其後佛到其國。入城乞食。衆人閉門。鉢空而歸。是時有一老女。持「破瓦器」盛「臭泔淫」。出門將棄。見佛鉢空漸來。思惟。如是神人降身行乞。慙一切故。信心清淨。慚愧白佛。且欲設供。更不能力得。今此弊食須者可取。佛知其心。受其施食。微笑。出「五色光」普照天地。告阿難言。是老女施佛食故。十五劫間天上人中受福。快樂後得男身。出家學道成辟支佛。爾時佛邊婆羅門立說偈言。汝是日種利利性。淨飯國王之太子。而以食故大妄語。如是臭食報何重。是時世尊出「廣長舌」。覆面上至髮際。時婆羅門忽然合掌白佛。

『往生拾因』の引用經論疏について

若人舌能覆鼻言不虛妄。何況髮際。心開意解。五體投地。悔過甚深。時佛爲種種說法得初道果。即舉手大聲言。一切衆人甘露門開。如何不出。城中一切婆羅門皆送五百金錢。與王迎佛供養。破制限法。永歸佛法。略抄予抄此文。翰與淚俱。其證小事。釋尊獨至舌相於髮際。今說大事。諸佛遍覆長舌於大千。彼婆羅門城王尙翻邪見歸佛法。何況念佛行者誰不「信受哉」。

②2 「大論云」 「大智度論」初品中放光釋論第十四之餘卷第八 (正藏二五一五a・b) の略抄

『又彼妙良藥施「一病比丘。或孝養父母。奉仕師長。或一日一夜持三八戒。持三沙彌戒」^{②3}。此等世善尙得往生。何況得聞阿彌陀佛不可思議功德名號。一心稱念。引彼「善」況此妙因。練磨自心。深生「信解」。

②3 「彼妙良藥……持三沙彌戒」

失譯人名「佛說十往生阿彌陀佛國經」(十往生經)

○道宣撰「大唐內典錄」(十卷) (AD六六四成立) に經名無し

(正藏五五・二一九以下)

○明佺等撰「大周刊定衆經目錄」(十五卷) (AD六九五成立) の第十五

五に疑偽經とある(正藏五五・四七四b)

○智昇撰「開元釋教錄」(二十卷) (AD七三〇成立) の第十八に偽妄亂

眞錄に編入(正藏五五・六七八a)

本經の内容「往生思想を鼓吹し、本經を信ずる者は四衆皆我が弟子といひ現身に成佛を得る。」「説有西方極樂世界十往生法。可得解脫。云何爲十一者。觀身正念常懷歡喜。以飲食衣服。施佛及僧。往

生阿彌陀佛國。」とあり、以下略釋

二、以「甘妙良藥」施「一病比丘及一切」

三、不害「一生命」慈「悲於一切」

四、從「師所」受戒淨慧修「梵行」

五、孝「順於父母」敬「奉於師長」

六、往「詣於僧坊」恭「敬於塔寺」

七、一日一夜中受「持八齋戒」

八、遠「離於房舍」常詣「於善師」

九、持「淨戒」勸「修於禪定」

十、持「淨戒」

また二十五菩薩の護持と、その菩薩名をあげている。

(正續一〇八七・四)

この經は、道綽「安樂集」卷下(淨全一―七〇九b―七一〇a)

善導「往生禮讚偈」(淨全四―三七五b)「觀念法門」(淨全四―二三

六a・b)源信「往生要集」卷下、(正藏八四―七四a―七七c)等に

引用せられている。

『疑者云。如「前所引」教理雖「然疑念難」絕。是即非「他」。罪業之身忽生「

淨土。仁所「疑執」罪業身者。爲「過去業」爲「今生業」。若疑「宿業」者何受「

難」受之人身。又值「難」值之佛法。若有「重罪」一身尙難。何況佛法。疑

者云。雖有「重罪」由「人業勝」惡不能遮。人報已盡苦果當受。今聞「

仁疑」返更增「信。彼人趣業惡尙不遮。何況淨土業。若疑「現業」者。

造「五逆」者具「足十念」滅「罪得」往。何況餘罪。疑者云。彼造逆者由「宿善強」臨「命終時。遇「善知識」具「足十念」即得「往生」^{②④}。又由「仁疑」彌以增信。逆者十念宿善尙強。何況一生不退念佛。』

②④「疑者云」東大寺の一學侶を云う。

②⑤「臨「命終時」……即得「往生」

a、單良那舍譯「佛說觀無量壽經」下品下生者(淨全一一五〇)

b、源信「往生要集」卷下、大文第七、念佛利益の第五

(正藏八四―七四b)

『故念佛三昧經云。若有「善男子善女人聞」此念佛三昧名「者。當」知彼

人非「唯二三四五如來所乃至無量阿僧祇如來所種」諸善根。已過「無量阿

僧祇。爾許如來所種」諸善根。厚集「功德。而獲」聞「此三昧王名字少分」。

何況受持讀誦。如「法修行爲」多人「說略抄」^{②⑥}

②⑥「念佛三昧經云……如「法修行爲」多人「說」

達磨笈多譯「大方等大集經菩薩念佛三昧分」卷第九

「若有諸善男子善女人。但能耳聞此三昧者。當知彼諸善男子善女人

輩。終非薄福種少善根也。亦非一如來所種諸善根也。亦非二三四五

諸如來所種諸善根也。——中略——亦非二百三百乃至千萬億諸如來

所種善根也。如是乃至亦非於無量億百千那由他。乃至亦非於無量阿

僧祇。乃邊無量阿僧祇爾許諸如來所。種諸善根厚集功德。而護聞此

寶三昧王字小分。何況當能書寫披讀讀誦受持。思量義趣如法修行。

爲多人衆分別解釋也。」(正藏十三―八六三c―八六四a)

『又下賤貧人獲一瑞物而以貢王。王慶重賞忽爲富貴。豈疑貧賤不爲富貴哉。世間瑞物其功尙爾。何況彌陀實號功德。是故行者不應自疑。又五不思議中佛法最不思議。佛法中彌陀名號殊不可思議。豈以思議心測不可思議法。勿以愚夫智疑如來境界。道登四果一向忘珠於衣裏。位高十地猶隔三月於羅穀。沉薄地凡夫乎。沉底下異生乎。嗟呼哀哉。疑覆大千之誠言。信愚小心之臆說。』

②⑦「下賤貧人……不爲富貴哉」道綽「安樂集」卷上

「下賤貧人獲一瑞物而以貢王王慶所得一加諸重賞斯須之頃富貴盈望豈可得言以下數十年仕備盡辛勤上下尙不達而歸者言其彼富貴無此事也」(淨全一一六八b)

②⑧「五不思議中佛法最不思議」

a、羅什譯「大智度論」卷三十

「經說五事不可思議。所謂衆生多少。業果報。坐禪人力。諸龍力。於五不可思議中。佛力最不可思議」(正藏二五二二三八c)

b、同卷第九十三

「佛法於五不可思議中。最第一」(正藏二五一七一四a)

c、曇鸞「往生論註」下(淨全一一二四〇a)

②⑨「彌陀名號殊不可思議」

『往生拾因』の引用經論疏について

a、康僧鎧譯「佛說無量壽經」卷下

「若有衆生以疑惑心修諸功德願生彼國不了佛智、不可思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智於此諸智疑惑不信、然猶信罪福修習善本願生其國」(淨全一ノ三三)

b、善導「往生禮讚偈」

「彌陀智願海、深廣無涯底」(淨全四一三六一a)

③⑩「道登四果……沉薄地凡夫乎」懷感撰「釋淨土群疑論」

「從使道窮四果。尙昧衣珠。位階十地。猶昏羅穀。沉凡夫學侶正習未亡」(正藏四七一五四b・c)

「爰有疑者忽然開悟。合掌流淚。予卽爲教鼓音經文云。若能深信無狐疑者必得往生阿彌陀佛國」已上實疑心懈怠往生之重障。

若得信精進自具念定慧。念佛是念。一心是定。厭穢欣淨卽是智慧。五根既立。豈留六道乎。又防護三業而不放逸是戒心也。是護心也。願求淨土是願心也。念佛功德廻向菩提施與衆生是施心也。是廻向心也。既具菩薩十信。盡昇九品蓮臺哉。夫未出三有火宅雖朝暮之悲歎。今值大善名號是一生之大慶。豈不棄衆事一念佛號哉。若今生空過。出離何時。傳聞有聖。念佛爲業專惜寸分。若人來謂自他要事。聖人陳曰。今有火急事既逼於旦暮。塞耳念佛終得往生。』

③①『教鼓音經二文云。……必得往生阿彌陀佛國』
失譯 「阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經」

「阿彌陀佛。於大寶花結加趺坐。有二菩薩。一名觀世音。二名大勢至、是二菩薩。侍立左右、無數菩薩周匝遶於此衆中。若能深信無狐疑者。必得往生阿彌陀國。」（正藏十二・三三三 a）

③②「夫未出三有火宅……出離何時」

道綽「安樂集卷」上第三大門より取意（淨全一ノ六九〇 a—六九三 b）
「往生拾因」後序（正藏八四—一〇二 a）

『是故寐稱念片時不_{無間}懈修也_{無餘}六時禮敬四儀不_{恭敬}背修也念佛爲_{恭敬}宗不_{恭敬}雜餘業_{無餘}修也終無退轉一畢命爲_{長時}期修也念佛一行既具四修。往生之業何事如之。般舟經云。時有跋陀和菩薩。於此國土_{無間}聞有阿彌陀佛。數數係念。因是念_{無間}故見阿彌陀佛。卽從啓問。當行何法得_{無間}生彼國。爾時阿彌陀佛語是菩薩言。欲來_{無間}生我國一者。常念我名數數專念莫有_{無間}休息。如是得_{無間}來生我國土已上』^{③③}

③③「無間修、恭敬修、無餘修、長時修—四修。」

- a、善導「往生禮讚偈」（淨全四—三五五 b）
- b、窺基「西方要決釋疑通規」（淨全六—六〇四 b—六〇五 a）
- c、源信「往生要集」卷中正文第五助念方法（正藏八四—五七 c—五八 a）

③④「般舟經云」支婁迦讖譯「般舟三昧經」卷上行品第二

「如是毘陀和。菩薩於是間國土聞阿彌陀佛。數數念。用是念一故。見阿彌陀佛。見佛已從問。當持何等法一生阿彌陀佛國。爾時阿彌陀佛。語是菩薩言。欲來_{無間}生我國一者。常念我數數。常當守念。莫有_{無間}休息。如是得_{無間}來生我國土」（正藏十三・九〇五 b）

『是故一切時處一心稱念、晝夜寤寐勿有_{無間}間斷。凡夫行者心如野馬。專念佛名何得_{無間}。答。誰言初心行者全不_{無間}起餘念。導和尚云。若貪瞋等煩惱來間隨犯隨懺。不_{無間}隔念隔時隔日。常使_{無間}淨亦名_{無間}修已上又爲_{無間}散亂人觀法難成。大聖悲憐勸稱名行。』^{③⑤}

稱名易故相續自念晝夜不_{無間}休。豈非_{無間}乎。又不_{無間}簡身淨不淨。不_{無間}論心專不專。稱名不_{無間}絕必得_{無間}往生。運心日久引接何疑。又恒所作是定業故。依之但念佛者往_{無間}生淨土其證非_{無間}一。』^{③⑥}

③⑤「一切時處一心稱念……勿有_{無間}間斷」

a、善導「往生禮讚偈」

「不_{無間}間行住坐臥一切時處若晝若夜常不_{無間}離行者。今既有_{無間}斯勝益憑願諸行者各須_{無間}至心求_{無間}住」（淨全四—三七六 a）

b、源信「往生要集」卷中正文第四正修念佛
「行住坐臥語默作。常以_{無間}此念在於胸中。如_{無間}飢念食。如_{無間}渴追水。或低頭舉手。或舉聲稱名。外儀雖異心心常存。念念相續寤寐莫_{無間}忘」（正藏八四—五六 b）

③⑥「凡夫行者心如野馬」道綽「安樂集」卷上（淨全一—六八八 a・b）

③⑦「導和尚云……亦名無間修」善導「往生禮讃偈」（淨全四—三五五b）

③⑧「又爲散亂人觀法成……晝夜不_レ休」

a、善導「往生禮讃偈」

「由_二衆生障重境細心麤識颺神飛觀難_二成就_一也是以大聖悲憐直勸專稱_二名字_一正由_二稱名易_一故相續即生」（淨全四—三五六a）

b、源信「往生要集」卷下 大文第八念佛證據

「只男女貴賤。不_レ簡_二行住坐臥_一。不_レ論_二時處諸緣_一。修_レ之_二不_レ難乃至臨終願_二求往生_一。得_二其便宜_一。不_レ如_二念佛_一」（正藏八四—七六c）

③⑨「運心久引日接何疑」

源信「往生要集」卷上、第二大文欣求淨土、第一聖衆來迎

「念佛功德。運心年深之者。臨_二命終時_一大喜自生、所以然_二者。彌陀如來以_二本願_一故」（正藏八四—四一b）

『如_二彼播州沙彌教信等_一——（以下本文省略）——具載_二彼上人傳_一焉。雖_二在家沙彌_一前_二無言上人_一。是依_二彌陀名號_一不可思議也。教信是誰。何不_レ勵乎。練_二磨其心_一稱名不_レ退。彼常念觀音者尙離_二難離之三毒_一。況常念彌陀人蓋_レ往_二易往之淨土_一哉。若常途念佛不_レ能_二勇進_一。依_二此經說_一修_二臨時行_一。要須_二閑處料_一理道場。先於_二西壁_一安_二彌陀像_一。若一日若七日。隨_レ堪莊嚴。隨_レ力供養。持戒清淨威儀具足。每日三時或四時或五時或六時。每時三萬或二萬或一萬或五千隨_二行者意_一發願回向專念勤

『往生拾因』の引用經論疏にこころ

修。如_二緯禪師_一七日念佛得_二百萬遍_一也。若七日夜勇猛精進至_二終焉之暮_一被_二彌陀之加_一豈爲_二永劫安樂_一不_レ勵_二七日苦行_一乎』

④⑩「沙彌教信」

卿貫姓氏不詳、光仁天皇の皇子と傳う、南都興福寺の學僧で唯識、因明に精通す。のち、厭離の志厚く、ついに諸國を遍歴し、播州賀古に草庵をむすび、西方に嚮せず、本尊を安ぜず、聖教を持たず、妻女を帶し、非俗非僧の形で日夜念佛をこととして息まず、人呼んで「阿彌陀丸」と稱す。稱名を勸持すること三十年、貞觀八年八月（八六六）寂す。「後拾遺往生傳」卷上（日佛全一〇七）「元亨釋書」第九（日佛一〇二）「東國高僧傳」第三（日佛一〇四）「本朝高僧傳」第三（日佛一〇二）「日本往生極樂記」（群從五）等に出ず。

④①「常念觀音者尙離難_レ離之_二三毒_一」

羅什譯「妙法蓮華經」卷第七、觀世音菩薩普門品第二五

「常念恭_二敬觀世音菩薩_一。便得_レ離_レ瞋。若多_二愚癡_一常念恭_二敬觀世齊菩薩_一便得_レ離_レ癡」（正藏九—五七a）

④②「此經說」羅什譯「佛說阿彌陀經」（正藏十二—三四七a）

④③「要須_二閑處料_一理道場……被_二彌陀之加_一」

源信「往生要集」卷中、大文第六別時念佛第一尋常別行者（正藏八四—六七b—六八a）の略抄